

追 悼 記

日本白鳥の会会長 松 井 繁

白鳥をこよなく愛し、白鳥保護に尽力された二人の方が昨年、本年と相次いでなくなられた。一人は前会長の家田三郎先生（昨年5月24日没）、もう一人は理事の門脇益市氏（本年7月24日没）である。謹んで日本白鳥の会を代表し、生前の会に対するご貢献に深甚なる謝意を表し、心から哀悼の意を表する次第である。

家田先生は会の創立の昭和48年6月から56年10月までの8年間、会の基礎固め、発展に尽力された。また本会創立時の一大目標であった、IWRBの第2回国際ハクチョウ会議のわが国で開催を推進された。この会議を準備していた私に、開催国の日本から演題を出さないといけないよ（私は中核団体であるわが会から、という意味に解釈した）とおしゃっただけで、注意めいたことは一言も話されなかった。昭和55年2月、札幌市で第27回のIWRBの代表者会議と第2回ハクチョウと第1回ツルの国際シンポジウムが開催された。この会議、シンポジウムが契機となり、鳥に関しての国際交流が盛んになった。この会の日本開催を提唱された家田先生の功績はまことに偉大であった。このこともあって先生は昭和57年5月9日に日本鳥類保護連盟より総裁賞を授賞された。先生はこの賞のことを一言も話されなかった。先生は鳥ばかりではなく、人生の師でもあった。昨年10月に私はサハリンへ行くために新潟に降りた際に先生の神前にお参りし、会を代表して心からお礼を申し上げた。

鳥根県の当会の理事、門脇益市氏は鳥根県東出雲町の意東海岸で、白鳥に給餌をし、定着させた功労者である。白鳥おじさんと呼ばれ、自らは白鳥乞食と申されていたが、当初のえさ集めの苦勞から出た言葉である。後に中海の干拓が進んできた時、漁師として、また白鳥給餌の経験者として、白鳥の自然のえさを枯渇させる中海の淡水化に最後まで反対し、環境庁長官、県知事に陳情された。このことが中海の防潮堤が閉ざされずに終わったことにつながったことは想像に難くはない。

亡くなる前に「白鳥が上を飛んでいる。」、「白鳥海岸の砂浜に白鳥が休んでいる。」と、そばの奥様や看護婦さんに話された。看護婦さんがこの暑いのに白鳥はこないよ。と返事をすると「いや、鳴いている。」、「上を飛んでいる。」といわれた。これを聞いて奥様は、主人は幸福な人だ、白鳥が迎えにきたんだ、と思われ心が休まった。と私に話された。

今ごろ、家田先生、門脇益市氏のお二人は天国で白鳥と一緒に遊んでおられることであろう。ご冥福を心からお祈りし、併せて白鳥とわが会を末長くお守りくださるようお願いする次第である。